

## 第一章

「はあ…はあ…」

息の荒い汗だくの女が狭い室内で男の足を持って引きずっている。まるで死んでいるかのように動かない男はかなり身長が高く、ガタイもいい。瞳を閉じていても、バランスよく配置されたパーツでその男がとんでもなく整った顔立ちをしていることが分かる。

「はあ…はあ…もう少し…」

一方、女の顔はいたって平凡だった。大きくも小さくもない目に小さな鼻に唇。頬にそばかすが散っているのだけが特徴のどこにでもいるような女。そんな女が、白いワイシャツに黒のベストとスラックスを上品に身に付けた男を必死に引きずっている。

「はあ…はあ…やっと着いた！」

女は男の足から一度手を離し、男の胸に両腕を回して引っ張ると、何とか布団の上に乗せる。

「はあ…はあ…次は…」

女は床に無造作に置いてあったベルベットの赤いリボンで男の両腕をぐるぐる巻きにした。

「…よし！できた！やった…やった！」

女は嬉しそうに飛び上がると、男の顔を両手で優しく包み込む。

「やっと私だけのものになってくれたね、お兄ちゃん」

ぐったりとして動かない実兄・潤清人（うるみ・きよと）から返事がなくとも、珊瑚（さんご）は一切構わずに笑っていた。

超人氣ピアノist潤清人の熱愛記事が出たのは1週間前、清人のヨーロッパ公演の最終日だった。顔良し、性格よし、身長よしのほか、その完璧な演奏で世界中のピアノファンを虜にする潤清人の初スキャンダルは世界中で報道され、大注目となった。ヨーロッパ公演が終わり、日本に帰るために空港に來た清人に世界中のメディアが群がり、コメントを求めた。清人はペコリと頭を下げるだけで何も話さない。しかし、そのお相手として報道された美人バイオリニストの女の事務所が「プライベートは本人たちに任せております」とまるで本当に交際しているかのようなコメントを出したおかげで、この報道が真実であるかのように連日ワイドショーで騒がれ続けている。SNSでは「私の清人があんなブス女に!」「絶対に許せない!」と女性ファンを中心に大炎上している状態だ。

「ふ、ふ、ふ、ふざけるなあー!」

そしてここでもまた大炎上している女がいる。清人の実の妹である珊瑚だ。不器用で人付き合いが苦手な故にいつも仕事をクビになり、曲を作ってアップロードして入る収入で何とか命を繋いでいる。そんな珊瑚はワnlームの狭い部屋にある大分古いテレビを両手で驚掴み、ブンブンとシェイクする。

「き、清人は私のお兄ちゃんなのに！私だけのお兄ちゃんなのにいい！なんでほかの女に取られないといけないの！絶対許さないんだからあああ！」  
部屋の壁に貼られたコンサートポスターに映った清人が珊瑚に笑いかける。

「あんな！あんな女に絶対渡さない…清人は…私だけのお兄ちゃんなんだからね!!」

清人と珊瑚は正真正銘の実の兄妹だが、十年、一度も顔を合わせていない。理由は単純、「住む世界が違うから」だ。

清人と珊瑚の両親は、それぞれが18歳、12歳の時に離婚している。美しくピアノの才能溢れた清人は、同じく美しい人気ピアニストである母に引き取られた。そして美しくもなく何の才能もなかった珊瑚は、平凡だがとんでもなく優しい父に引き取られたのだ。

スーパーの店長として働き、必死に自分を育ててくれた父は数年前に病気であつという間に亡くなってしまった。けれど父は珊瑚に古いけれど居心地の良いこのアパートを残してくれた。そのおかげで、家賃を払わず、何とか生活していている。

そして清人は、もともと幼い頃からピアノの才能を発揮し、メデイアに取り上げられていたが、離婚後、さらにその人気は盤石なものとなった。有名

音楽大学を卒業した後は、海外を股に掛ける超売れっ子ピアニストになり、ほとんど日本にいない生活を送っている。

「清人：清人お…」

珊瑚はそんな芸能人ばりに有名になった清人との連絡手段を持っていなかった。両親が離婚した時、母に「あなたから連絡が来ると清人の人生の邪魔になる」と言われ、連絡先さえも教えてもらえなかった。父親を通して何とか母に頼み込み、手紙を送ることは許されていたが、清人から返事が来ることは一度もなかったのだ。

「嘔吐き嘔吐き嘔吐きい！」

珊瑚は清人の笑顔がプリントされたクッションをボカスカ叩く。

「ずっと私だけのお兄ちゃんできてくれるって言ったのにい！」

潤んだ瞳からとうとう涙を零した珊瑚はせんべい布団に倒れ込んでワン

ワンと泣き出した。

そう。珊瑚は病的な程に実の兄が好きだった。

「清人：清人お…」

えぐえぐと泣きながらクッションの清人に向かって唇を尖らせる。

「ずっと私だけを守ってくれるって言ったくせにい」

清人は、ピアノのことで母親に折檻を受ける珊瑚をずっと庇ってくれていた。優しさ故に母に逆らえない父の代わりに、「そんな弾き方をしない！」と母に怒られる珊瑚の手を擦ってくれた。「もう珊瑚を虐めないで！」と立ち向かってくれた。ベッドで泣き続ける珊瑚を「お兄ちゃんがずっとお前を守るから。ずっとずっと俺の一番は珊瑚だから」とあやすように抱きしめてくれた。離婚が決まり、離れたくないと顔をぐちゃぐちゃにしてむせび泣く私に「大人になったらまた家族になろう」と言ってくれたのだ。

「なんで私じゃなくてほかの女と家族になろうとしてるのお…」

清人の言葉を胸にこの十年間、ずっと珊瑚は清人と再会し一緒に暮らすことだけを希望に生きてきた。連絡が来なくても、会えなくても、ずっと清人は自分を思ってくれていると信じて。

「なのにい!!ほかの女と付き合ってイチャイチャしてるなんてありえないでしょ!!」

「うん…妄想もそろそろ大概にしないと日常生活に支障が出るよ?」

「妄想じゃないって!」

珊瑚は一緒のオンラインゲームをしているネット友達のハンドルネーム「お姉ちゃん大好き男」に反論した。ヘッドホンの向こう側から大きなため息が聞こえてくる。

「ほんと大丈夫？僕、心配だよ。ガチ恋極めすぎて超人気ピアニスト、狂った女ファンに刺される！とかやめてよね…」

「違うって！ほんとに兄妹なの！」

「…潤清人のホームページには一人っ子で兄妹はいないって書いてあります」

「それは私という可愛い妹が世間に晒されないように清人がわざとそう言ってるの！」

「うわあ…やばい…ガチ恋やば…。ほんと捕まっても僕、引き取りになんか行かないからね？」

「酷い！自分も実の姉が好きなくせに！」

「うるさいよ、へちゃむくれ」

「見たことないくせにい！」

ひんひんと無様に泣く珊瑚に姉好き男は長い長いため息を吐く。

「そんなに兄妹だって言い張るなら、会いに行けば？明日、日本に着くんでしょ？兄妹なら家ぐらい知ってるんだろうし」

「…」

「はい、ダウト」

「だって！もう十年も会ってないんだもん！」

「十年も会ってないのに、よく自分たちの絆は永遠とか寒いこと言えるよね。ほんと気持ち悪っ…」

「空港！空港に行けば絶対清人が見つけてくれるもん！」

「はいはい」

「絶対絶対ほんとだから！」

珊瑚は全く相手にしてくれない姉好き男にぎゃんぎゃんと文句を言い続

けた。

「き、清人の人気を舐めてた…」

S N Sなどで清人の飛行機が到着する時間を調べた珊瑚は、その予定時刻よりも2時間程早く空港に来た。一番前までは行かずとも、清人から見えるぐらいの位置は確保できるだろうと信じて。しかし、それどころの話ではなかった。空港は入り口付近から人で溢れ、到着ロビーになどとても行けそうにない。そもそも最前列付近は、熱愛について質問したい報道陣が陣取っていて、その背後には目を血走らせた女性ファンが座り込み、清人の到着を今か今かと待っているのだ。

「うう…わ、私だって！」

何とか気合を入れてその人だかりの中に飛び込もうとするが、「はあ？ 後

で来たくせに前に行けると思ってたの？」と「清人大好き♡」と書かれたうちわを持った綺麗なお姉さんにガングレされ、珊瑚はすごすごと空港外にあるベンチに撤退してきたのだ。

「ああ…そろそろ着く頃だなあ…」

疲れ切った珊瑚が肩を落としていると、屋内からとんでもなく大きい歓声が届いてきた。そして清人の名を呼ぶ声が聞こえてくる。

「清人…！」

勢いよく立ち上がった珊瑚は、体力と勇気を振り絞ってまた空港の中に入ろうとした。

「ちよつと下がって！」

「ぎゃ！」

しかし、出てきた屈強な警備員に体を強く押されて後ろに倒れ込んでし

まった。そして警備員の後ろをキャップとマスクを付けた長身の男が通り過ぎる。

「清人……？」

十年見ていなくても忘れない。瞳だけでも見れば分かる。忘れられるはずがないのだ。

「清人！清人お！」

珊瑚は大声で必死に愛する兄の名前を呼んだ。一瞬びくりと震えた清人の顔がゆっくりと珊瑚の方を向き、しっかりと視線が絡み合う。

「清人……っ！」

——気付いてくれた。嬉しい。

けれどそれは当たり前のことだと思い直す。だって自分は清人の大切な妹なのだから。

「清人！」

珊瑚が手を伸ばす。清人は自分のことを忘れていない。きっと笑顔で駆け寄ってきて抱きしめてくれると信じていた。

「…」

しかし、そうはならなかった。清人はすぐに視線を逸らすと、早足でタクシーに乗り込み去って行った。その後ろを報道陣やファンが追いかけていく。

「うそお…」

珊瑚はへらつと笑うことしかできなかった。

『ちよつと。いくら在宅で仕事してるって言っても忙しいっちゃ忙しいんだよ、僕は』

「…」

『自分から電話してきて何黙ってんの？』

「…」

『…珊瑚？』

「うえ…雪（ゆき）い…」

珊瑚は涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながらハンドルネーム「お姉ちゃん大好き男」こと雪に電話をかけていた。

『どうしたの？まさか…ほんとに清人を…！』

「うええええん！雪の言う通りだった！清人は！わだしのことなんがぜんぶわすれであああ！」

『うわあ…ほんとに行ったんだ。こわ…』

「なぐさめでよお…！」

『嫌だよ。目が覚めて良かったんじゃないの？もうガチ恋はやめて普通の  
人、好きになったら？じゃあ僕忙しいから！』

「ああ！」

すぐに通話を切られた珊瑚は「薄情者お…」と呟きながら俯く。まだ空港  
のベンチに座ったままだった珊瑚は、顔をシャツで拭って立ち上がり、ゆっ  
くりと歩き出す。

「…お兄ちゃん」

零れ落ちそうになる涙をぐっとこらえる。

そう、これが現実だ。今まで散々分からされてきた。ハッピーエンドなん  
て自分には用意されていない。何の才能もない平凡で社会の役に立たない  
自分と、世界中で活躍する清人の人生はもう交わることはないのだ。

「でも…元気そうで良かったなあ…」

えへへと珊瑚は声を出して笑う。十年前よりも身長が伸びて体格もかなり良くなっていた。キュツと引き締まった腰はとてもセクシーでときめいてしまった。

「：十年ぶりに生の清人に会えたんだから嬉しく思わないと。今日はお祝いで焼き鳥でも買って帰ろう！」

なんとか自分を鼓舞して珊瑚はのろのろと帰りの途に就いた。

「つくねとぼんじりとせせりも買った！後はこの前の清人の中国公演の時の動画を見たら完璧……！」

電車を乗り継いで帰り、自宅近くのスーパーで特売の焼き鳥セットを買った珊瑚は少しだけ腫れが引いた目を嬉しそうに細めて自宅アパートに向かった。

「ふふ！久しぶりにお酒も買った！今日は楽しむぞ！」

無駄に足音が響く階段を登り切った時。

「あ…れ？」

珊瑚の玄関の扉に誰かが寄りかかり、タバコを吸っている。まるで覚えがないが借金取りでも来たのかと身構えるが、よく見るとそのシルエットに珊瑚は非常に見覚えがあった。具体的に言うとな数時間前に十年ぶりに会ったある人物のシルエットにそっくりなのだ。

「き…清人…？」

宙を向いていた視線がゆっくりと珊瑚に向けられる。その目に光はなく、まるで深い闇に囚われたような色に思えた。

「清人！」

珊瑚は急いで駆け寄る。清人は何も言わずに珊瑚を見下ろしていた。

「っ…」

「…」

「清人が！私の清人が不良になっちゃった！」

わなわなと震える珊瑚はだらんとして力の全く入っていない清人の手をぎゅっと掴むと家の鍵を開けて清人を無理やり部屋へと押し込む。清人は何の抵抗もせずにすんなりと部屋に入った。

「清人！ダメだよ、タバコなんて！ほら！」

珊瑚がタバコを指差すと清人がゆっくりとそれを指で口から外した。大人しく言うことを聞く清人に珊瑚がにっこりと笑うと、清人は高そうな革靴を脱いで部屋に上がってキッチンへ向かい、そこにタバコを捨てた。そして、そのまま床に崩れ落ちたのだ。

「清人ッ！」

珊瑚が転びそうになりながら清人の下へ向かう。

「清人！清人！」

どこか怪我でもしているのだろうか、珊瑚が顔を真っ青にしながら呼びかけるが、一向に返事はない。

「清人……？」

珊瑚が清人の口に耳を寄せると「くーくー」と規則正しい寝息が聞こえてくる。

「ね……寝てる……」

一気に脱力した珊瑚はその場にへたり込む。

「き、清人！寝るならお布団に行かないと！」

そう言ってゆさゆさと体を揺らす、清人が目を覚ます気配はない。

「うう……せめてコートを脱がさないと」

靴と同じくすごく高そうな黒のコートを脱がすと、清人が演奏する時でおなじみの白いワイシャツに黒のベストがあらわになる。清人の逞しい肩幅ときゅっと締まった腰がより強調された格好は、珊瑚が一番好きな服装だ。

「うう…カッコいい♡」

暴れ出す心臓を何とか抑え込みながら、珊瑚は必死にコートを脱がして、ワイシャツのボタンを緩める。すると、脱がしたコートのポケットからゴトツという音がしてスマートフォンが零れ落ちた。

「あっと！」

画面が割れていないかと確認しようとした時、画面にたくさんの通知が来ているのが見えた。

『清人、早く会いたい』

『あなたの声が聞きたい』

『愛してるの清人』

「…はあ？」

珊瑚は無意識にスマホを床に叩きつけた。

「…あ…」

慌てて拾い上げるとスマホの画面はバツキバキに割れてしまっていた。

「ど、ど、どうしよう！」

慌てても最早取返しのない事態に、珊瑚は頭を抱えて自分の脊髄反射的な思考を強く反省する。しかし、そんな間にもピロンピロンと清人のス

マホに来る通知は一向に止む気配はない。

「もう！うるさいなあ…」

もう一度画面を見る。

『どこにいるんだ、清人？』

『次の公演はアメリカだ。ちゃんと体調を整えておけよ』

『休暇なんてある訳ないだろう。日本にいられるのは1週間だ。その間に関係者との食事会や顔合わせが詰まってる。必ず来いよ』

『お前に休みなんかない』

「…」

珊瑚は黙って寝息を立てている清人の顔を眺める。その目の下には大きな

な限が出来ていて、顎も痩せすぎてシャープすぎるような気がする。

「ん…」

「あ…」

顔を顰めて呻いた清人の手が珊瑚の服をぎゅっと掴み、再び寝息を立て始めたのを見て、珊瑚は腹を決めた。清人の手を優しく包み込んで外した後、ベッドの下に押し込んでいる段ボール箱を引っ張り出し、中からベルベットの長めの赤いリボンを取り出す。そして清人の長い足を引っ張って布団の上に乗せると、その両腕をリボンでぐるぐる巻きにした。

「やっと私だけのものになってくれたね、お兄ちゃん」

うつとりとした表情で清人を見つめた後、珊瑚は上着を羽織って外へ飛び出す。

「…私が助けてあげるからね、清人」

そんな小さな声は誰にも聞こえないまま夜の闇に溶けた。

「うう…重い」

24時間営業のスーパーなどでどっさりと食料や衣類を買い込んだ珊瑚はヨタヨタと歩きながら階段を登り、自宅の玄関のドアを開く。

「あ…」

すると布団の上にあぐらをかいた清人がぼんやりとした表情でこちらを見ている。

「っあ…き、清人！」

荷物を置いて傍に駆け寄った珊瑚は、清人の青白い顔を覗き込んだ。

「大丈夫？どこか気持ち悪いの…？」

その質問には答えず、清人が自分の腕を持ち上げる。

「これは…?」

「っ!」

蜂蜜をさらに煮詰めたような甘くてドロドロとした声音で囁かれ、珊瑚の動きがピタリと止まる。珊瑚が言葉に詰まっていると、清人がもう一度口を開いてゆっくりと言葉を紡ぐ。

「これは何…?」

「あうッ!」

耳元で囁かれて珊瑚は目をぎゅっと閉じて俯く。わなわなと震えて何も言えない珊瑚をじっと見下ろし、清人は拘束された自分の両腕を見つめる。

「…外していいのか?」

「ダ、ダメ!!」

勢いよく珊瑚が顔を上げ、口でリボンの端を噛んで引っ張ろうとしている

る清人を布団に押し倒す。その拍子に珊瑚もまた清人の体の上に倒れ込んでしまった。十年前とは違う大人の男の体の厚みに珊瑚は顔を真っ赤にして降りようとする。しかしその前に清人が拘束された両手を下ろしてきて、珊瑚をその腕の中に閉じ込めてしまった。

「き、清人!？」

「ねえ…。なんでこんなことした？」

「ひゃうッ♡」

清人がスリスリ♡と珊瑚の頬に自分の頬を擦り付ける。顔を真っ赤にした珊瑚は何とか清人の腕の中から脱出しようとするが、下から硬くなったちんぽで突き上げられて、ガチンと固まってしまった。

「あ…え…？」

「ん？…ああ、お兄ちゃんのが当たっちゃったな。ごめんごめん」

「ひゃうッ！」

口では謝っているのに、清人はゆさゆさ♡と腰を揺らし続けている。薄い短パンと下着しか身に付けていない珊瑚は、股間に清人の硬いそれを感じて、目を白黒させながら体を震わせることしかできない。

（え？な、何？なんで、清人がこんな…え？ゆ、夢なの？これ？）

確かに珊瑚は清人のことが大好きだった。けれどそれは「兄」としての清人のことだ。

「あ…ひっ…ま、待って…待って、清人ッ♡」

珊瑚が清人の胸板に手を置き、必死に首を横に振る。

「ま、待って…？待って？わ、私、珊瑚だよ？お兄ちゃんの妹の…」

「知ってる」

そう言って清人は目を細めて珊瑚の顔を見つめる。

「俺の…俺だけの珊瑚だ。…ずっとずーっと夢に見て…目が覚めて…絶望して…繰り返して来た」

清人が腕をゆっくりと上げて珊瑚を解放する。

「っあ…！」

珊瑚は四つん這いで布団から降りると、急いで部屋の隅に移動する。

「お、お兄ちゃん…！ひッ！」

膝立ちになった清人はもう一度リボンの端を噛むと思いつき引っ張って拘束を解いてしまう。うっとりとした表情で決して珊瑚から視線を外さない清人を見て、珊瑚の体にゾクゾク♡と今まで経験したことのない刺激が走った。

「あ…う…」

逃げようとしたけれど、足が上手く動かず、珊瑚はその場にぺたんと座り

込んでしまった。

「珊瑚…俺が怖い…？」

「ひうッ♡」

立ちあがった清人がゆっくりと歩み寄ってきて、鍵盤の上では美しい音色を奏でる骨ばった手でスリ♡と珊瑚の頬を撫でる。自分を見上げる珊瑚の目尻、頬、首筋をツー♡と指でなぞっていく、最後にその指をくちゅ♡と口に含んだ。

「お、お兄ちゃん…？」

「…我慢はもういいかあ」

「あ…」

清人が珊瑚に覆い被さろうとした時。

「やっぱり我慢してるんだね、清人！」

「…は？」

珊瑚は勢いよく立ち上がると、清人の体をぎゅうぎゅうと抱きしめた。

「やっぱり！仕事が忙しすぎて我慢してるんでしょ！ほんと日本に帰ってきてゆっくり休みたかったんだね！だからさっきもスヤスヤ寝ちゃってたんでしょ！」

「…」

清人が一瞬だけ怪訝そうな顔をした後、すぐに眉を下げた情けない顔に変わり、ぐりぐりと顔を珊瑚の頭に擦り付ける。

「そう…疲れたんだ、俺。仕事が大変で…」

「やっぱり！ふふ、大丈夫だよ、お兄ちゃん！私がお兄ちゃんを助けてあげるから！」

「…どうやって？」

清人がコテンと首を傾げる。

「日本にいる1週間、私が清人をこの部屋に監禁するの！」

「監禁？」

「うん！」

「珊瑚が？俺を？」

「うん！私が清人を癒してあげる！」

「：珊瑚が一週間、ずっと俺のお世話をしてくれるってこと？」

「うん！」

元氣よく何度も頷く珊瑚をじっと見ていた清人がふにやりと笑った。

「嬉しい。：俺を監禁して、珊瑚」



「まずはお風呂に入ってきて。着替えはこれ！」

「これ？」

「うん！」

「分かった」

珊瑚は急いで買ってきた男性用の下着とゆるゆるスウェットを清人に手渡す。すると清人はその場でワイシャツとベストを脱ぎ始めた。

「ちょ、ちょ！あっちで脱いで！」

「…疲れたから珊瑚が脱がせて？」

「なっ！」

ベストのボタンを途中まで外した清人がため息を吐く。

「そ、そのぐらいは自分で…」

「色んな人にきき使われて、お兄ちゃんはまだもう疲れたんだ…。唯一の妹にも優しくしてもらえないならもう…」

「分かった！分かったから！」

（お、お兄ちゃんってこんなだったっけ？）

そんなことを考えながら、珊瑚は清人のベストのボタンを外し、背伸びをして脱がせてやる。

「シャツもお願い、珊瑚」

「そ、それは…！」

「…やっぱり俺なんか」

「分かったからあ！」

ヤケクソになった珊瑚が手早くボタンを外し、えいやッ！とワイシャツをはず取る。すると清人のピアニストなのにしっかりと鍛えられた上半身

が露になった。

「ひえ……！」

ずっと思い続けてきた兄がとんでもなくカッコよくて色っぽくて、珊瑚は顔を真っ赤にして後ずさった。

「どこに行くんだ、珊瑚？」

「ひゃあ！ちよ、な、なんで！」

「はい、バンザイして？」

「ちよ、お、お兄ちゃん！なんで私の服まで！」

「なんでって……。さっき珊瑚が言っただろ？1週間俺のお世話をしてくれるって」

「はえ……？」

「しっかり俺のお世話してくれよ♡」

「ひゃああ！」

シャツを一気に脱がされた珊瑚は上半身をブラジャーだけにされてしま  
う。

「ま、待ってえ！」

「…随分大きくなったな」

「っ？」

「何でもない」

清人が小さな声で呟くが、珊瑚の耳には届かなかった。自分の少し大きめ  
な胸を必死に隠して、珊瑚はトイレに逃げ込もうとする。あと少しでドアノ  
ブに手を掛けられそうになった時。

ダンツツツツ!!

「ひっ！」

長い足が扉に叩きつけられ、開くことができなくなってしまう。

「こおら、お兄ちゃん置いてどこにいくつもりかな？」

「ひゃうッ♡」

後ろから覆いかぶさって来た清人が珊瑚のうなじにふう♡と息を吹きかける。それだけでビクビク♡と反応してしまう自分の体が恥ずかしくて、珊瑚は床にしゃがみ込もうとうした。

「ダメ。立ってて」

「きゃあん♡」

がぶッ♡と清人が珊瑚のうなじに噛みつく。

「っ♡ふぁ♡やッ、清人お♡」

噛まれた場所を、長く熱い舌でレロレロ♡と舐められる。逃げようとする珊瑚の腰に清人が血管が浮かんだ逞しい片手を回して、グッ♡と引き寄せ

てくる。

「逃げるな、珊瑚。お兄ちゃんのこと癒してくれるんだろ？」

「んうう♡」

清人がレロオ♡と珊瑚の耳朵を舐めると、後ろからカクカク♡と腰を振ってくる。

「やっ：嘘ッ♡ダメ、ダメだよ、清人♡」

「ん：なんで？」

「だって、私はお兄ちゃんの妹でっ♡」

「癒してくれるって言ったのは嘘だったのか？」

「きゃあ！」

体を持ち上げられて、互いに向き合う体勢になった。珊瑚は何とか清人を説得しようと上を向く。そしてすぐに後悔した。

「あ…う♡」

「十年ぶりに会ったお兄ちゃんを…いい甘やかしてくるんだよな、珊瑚？」

蕩けた表情でコテンと首を傾げる清人の色っぽさに、珊瑚はハクハクと口を開け閉めすることしかできない。清人の手がするつと珊瑚の腰に回り、また股間をグッ♡グッ♡と押し付けられる。

「ひゃあ♡やだっ♡お兄ちゃん、だ、だめえ♡ダメだってばあ♡」

珊瑚は思わず目の前の大きな体に抱き着く。唇を噛みしめて無様な喘ぎ声が漏れないように耐える珊瑚に、清人は小さく舌打ちした。

「なんで声我慢するんだ？お兄ちゃんはずーつと珊瑚の声を聞きたくて堪らなかったのになあ」

「きや♡」

清人は珊瑚の体を抱き上げると、そのままのしのしと歩き出す。

「待って、お兄ちゃん、ダメだってえ」

「はあ…なんか口寂しいなあ。やっぱりタバコでも吸おうかな」

「っタ、タバコはだめえ！」

珊瑚が清人の口を両手で塞ぐ。クスクスと笑った清人は、その手をレロレロ♡と舐める。

「きゃあ!!き、清人の変態い！」

「タバコはダメなら珊瑚がちゅーしてくれ」

「なっ! なっ!」

「ちゅーすればタバコ、我慢できる」

「そ、そんな! だって兄妹で…!」

「ちゅーしたら子供ができる訳でもあるまいし。それにここには俺たちし

かない。誰にも気付かれない」

「あ……」

小さな浴槽がある風呂場に入った清人は、珊瑚を床に降ろしてまた壁際に追い詰める。そして自分の親指でトントンと珊瑚の唇をノックした。

「ここ……。珊瑚の可愛いお口でお兄ちゃんのお口、ペロペロってしてくれないのか？」

「んッ♡う♡っ♡♡」

「お口、開けて？」

「んあ……ッ♡」

清人の指がぐりぐり♡と唇を割り開こうとする。珊瑚は万が一でもピアニストである清人の手を傷付けたらいけないと思わず口を開いてしまった。

「いい子だな……」

「んう♡」

清人の指が珊瑚の口内に侵入してくる。舌を優しく撫でたかと思うと、くぷくぷ♡と出し入れされる。

「…ちいせえ舌…かぁいいな。珊瑚、舌出して？お兄ちゃんにべー♡ってして見せて？」

「あ…ふぁ♡んう♡」

「ほおら♡疲れ切ったお兄ちゃんを珊瑚の可愛い姿で癒してくれ♡」

「ふえ…お、お兄ちゃん…ッ」

「…俺しか見てないから、珊瑚」

「ふぁ…♡」

耳元で低く甘く囁かれる。珊瑚は頭がジンッ♡と痺れてまともに考えることができなくなってきた。

(カッコいい…清人…私の…大好きな…お兄ちゃん…ツ♡)

——兄弟なのに。こんなことしちゃダメなのに。

そんな警告が頭のどこかで鳴っているような気がするのに、清人から与えられる快感の方が上回っていて、珊瑚は蕩けた表情でコクリと頷いてしまった。

「あえ…♡」

珊瑚が恐る恐る自分の舌を外に出す。ぎゅうつと目を閉じながらも、体を震わせて舌を出す珊瑚に、清人は嬉しそうに舌なめずりをする。

「舌も大きくなったなあ、珊瑚？お兄ちゃん、可愛い珊瑚がどこもかしこも育ってて嬉しいな」

「んう♡…はあう…」

出し続けている珊瑚の舌からトロお♡と唾液が滴り落ちようとする。清

人はそれを自分の舌で受け止めると、口の中に含んでくちゅくちゅ♡と転がす。

「き、清人ッ!?汚いよ!」

音で清人が何をしているのか気付いた珊瑚は、目を開けて急いで清人の口を開けようと手を伸ばす。

「あゝゝんッ♡」

「きゃあッ♡」

そんな珊瑚の指を、清人は口をくばあ♡と開けて咥え込んでしまった。

「やっ、清人お!」

「んッ♡…ん♡…ふ…♡ん…ッ♡」

「やだあ♡ぺろぺろしないでッ♡っう♡かみかみもやだあ♡♡」

「…なんで?珊瑚の…ん♡♡…小さくて…可愛い…指♡…ちよつとだけ…可

愛がつてるだけなの？」

「ひううッ♡」

清人はニヤリと笑って珊瑚の目を見た後、指の先端を甘噛みして、ぢゅう♡と吸い上げる。

「変ッ♡こんなの…変だよお♡」

「なあにが？」

ちゅうちゅう♡と珊瑚の指全てを順番に吸い上げながら、清人が珊瑚の尾てい骨をスリスリ♡と撫でる。

「だってえ…だって、私と…清人はッ…ん♡兄妹…でッ！」

「実のお兄ちゃんに触られて、こおんなにまんこ濡らしてるのは珊瑚の方なの？」

「っえ…?」

清人が珊瑚の下着に片手を突っ込むと、すでにじっとりと濡れているまんにヌルウ♡と指を這わす。

「ほら、自分で分かてるんだろ? トロトロのお汁がいっぱい下着に付いてる。おまんこの割れ目からもうっぱいプクウ♡って新しいお汁が出てきてるのに? 変態はどっちかなあ?」

「あ…っあ…ち、ちがっ…!」

「違うない。ほら」

「っ!」

清人がくぷくぷと指先をまんこのほんの浅いところだけ出し入れして、ゆっくりと引き抜く。清人は人差し指と親指でヌトォ♡と粘つく愛液を引っ張り、珊瑚はその卑猥な光景を眼前で見せつけられてしまう。

「っあ……うふ……え……」

「ほらあ。実のお兄ちゃんの手でおまんこぐちゅぐちゅにしているのは、珊瑚の方だろお？ダメだって言うなら感じなければいいのに、自分はすっかり気持ちよくなってるんだもんなあ。……なのに、俺のせいだって言うのか？珊瑚は意地悪で悪い子なんだな」

「ふえ……うえ……」

目を見開き驚いていた珊瑚の顔がだんだんと歪んでいく。眉は下がり、目を潤み、唇はワナワナと震え、息が荒くなる。

「絶対に目を閉じるなよ、珊瑚。自分はお兄ちゃんに体を触られただけでおまんこ汁びちゃびちゃに溢れさせちゃう変態さんだって自覚しろ」

「うえ……うええん……ッ！」

とうとう珊瑚の瞳からボロボロと涙が零れ落ちる。

「ごめ…ごめんなさいっ…変態で…ごめんなひゃいい…ツうえええん」

「っうゝゝゝゝ♡♡♡♡」

子供のように顔をくしゃくしゃにして泣き出した珊瑚を、清人は頬を紅潮させて至近距離で眺める。

「かわぁいい♡かぁいいねえ、俺の珊瑚♡泣かせちゃってごめんね♡でも、珊瑚が悪いんだぞ？…俺は言いつけを守ったのに、珊瑚が破っちゃったんだから♡…しかも俺を監禁するなんて可愛いこと言ってるさあ」

「うえ…お兄ちゃん…お兄ちゃん…お願い、珊瑚のこと嫌わないで。変態な妹でも嫌いにならないでえ…!」

えぐえぐと泣きじゃくる珊瑚の言葉を聞いて、清人がピタリと動きを止める。

「…俺がお前のことを嫌う訳ないだろ」

呆れたような、そしてどこか嬉しそうな顔で清人は珊瑚の体を優しく抱きしめる。

「お兄ちゃん：お兄ちゃんツ：きやあんツ♡」

「珊瑚の可愛さに免じて、今日は指だけで我慢してやる。…だからいーっぱい可愛く喘いでくれよ、珊瑚♡」

ぬ  
ぷ  
う  
う  
う  
う  
う  
う  
う  
う  
う  
ツ  
♡  
♡  
♡

「ん  
う  
う  
う  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
! ! !  
? ? ?  
♡♡♡  
♡♡♡」

清人の指が珊瑚のまんこの割れ目をスリスリ♡と撫でた後、卑猥な水音を立てて挿入される。珊瑚がきゆう♡と反射的に足を閉じると、清人が耳元で「閉じたらダメだろ?」と囁いてくる。

「つう♡え…あう♡ゆびい…う…そお♡」

「はあ♡熱くて…トロトロで…いっぱいいきゅうきゅう♡って締め付けてく

るなあ♡そんなにお兄ちゃんが恋しかったのか、珊瑚お？」

くちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆくちゆく♡♡

「ひう~~~~♡やああ♡なか、動かしちゃやだあ♡だめだめえ♡」

清人がねじ込んだ指の先端だけを器用にクイクイ♡と動かす。その指はザラザラとした部分を的確に押し込んできて、珊瑚はバチバチ♡と頭が焼き切れそうになる快感に腰を逃がそうとする。

「もうダメ。逃がさない。きついんならお兄ちゃんにしがみつけ」

「あううう~~~~♡♡♡」

優しく甘やかすように、蕩けさせるかのような声音で囁く清人に、珊瑚は強く抱き着く。それを易々と受け止めた清人は、これまでで一番強く珊瑚の体を片方の腕で掻き抱いた。

「珊瑚：珊瑚、珊瑚、珊瑚。俺の珊瑚。可愛い：俺だけのための珊瑚。これ

からはずっと…っ!」

「んううう♡おにいちちゃん♡おにいちやあん♡やだああ♡しよこ、こちゅこちゅ、ちゅよいのお♡」

「ああ♡ごめんごめん、珊瑚のうぶまんこ、ちょっと苦しかったな♡ほおら、優しくトントンな?ほら、トントン♡トントン♡」

「んう♡ん♡ん♡ん♡ん♡」

「はは♡可愛いお声になってきたな?Gスポット、お兄ちゃんにトントンされると、頭がバカになりそうなくらい気持ちいいだろ?」

「ひいいん♡♡♡おッ♡」

ぐうう♡と曲げた指を強く押し込まれた瞬間、珊瑚の口から野太い声が漏れる。その瞬間、珊瑚と清人のどちらも動きが止まった。

「珊瑚♡」

「清人のばかああ！」

清人の眼がドロリと溶ける。

「可愛い♡珊瑚ちゃん、そんなエッチなお声出せるの？ かぁいい♡かぁいいねえ、珊瑚ちゃん♡ねえ、もっと聞きたいよ♡お兄ちゃんにそのお声もつと聞かせて？ ねえ、お兄ちゃんの耳元でもつとつと『おッ♡おッ♡』って喘いでほしいなあ♡珊瑚ちゃん♡」

「いやああ♡やだやだやだ♡こんな声で、いやああ♡」

「珊瑚ちゃん♡珊瑚ちゃん♡じゃあ、お兄ちゃんも一緒にするから♡お兄ちゃんもひつくい声で『おッ♡おッ♡』って喘いであげるから♡そしたら、恥ずかしくないだろ？」

「っうう♡んッ♡んッ♡お、お兄ちゃんもお？」

「うんうん♡でもその代わり、珊瑚ちゃんの小さくて可愛いおてでに

にのおちんちん、ちゅこちゅこ♡ってするお手伝いできる?」

デレデレと相好を崩した清人が珊瑚の手を持ち上げ恋人つなぎにすると、  
にぎにぎ♡と握り込む。

「でも、でもお♡」

「ただおまんこくちゅくちゅ♡ってしたり、おちんちんくちゅくちゅ♡  
てするだけだよ?そんなのみんなやってる♡」

「うそ…うそだあ♡んううう♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「んうううううう♡♡♡」

「ほら、早くしないと珊瑚ちゃんだけ『おッ おッ♡』って言う羽目にな  
るよ?おちんちんはにいが出してあげるから♡」

「ひ♡♡」

清人がスラックスの中から自分のちんぽを取り出す。すでに硬く勃起したそれは先端からぷくう♡と透明な液を溢れさせていて、それがダラダラとちんぽを伝って床に落ちていく。

「やだぁ♡こ、こんなえっちで…おかしいよぉ♡」

「また嘘付いて…。いにいのおちんちん見て、おまんこキュンキュン♡ってさせたくせに♡俺の指、可愛く締め付けてきてるだろ？」

ぐちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅちゅ♡♡

「ん、おッッッ♡♡♡」

清人の指が二本に増やされ、ぐう♡とさらに奥まで挿入される。また自分の口から漏れた低い声が恥ずかしくて、珊瑚は清人の首に両手を回し、頭を下げさせると自分の口で清人のそれを塞いだ。

「ッ!?!♡」

「んううう♡♡」

（やだッ♡自分の声も…清人のエッチなセリフも…♡これ以上聞いたら、おかしくなるッ♡♡♡）

まともにキスもしたことない珊瑚は、ただただ押し付けるだけのつたないキスが続ける。しかしそんなキスでも清人には十分なようで、驚きで開かれていた瞳が気持ち良さそうに蕩けていく。

「んう♡…清人お…♡」

「さんご…さんごちゃん♡…んう♡…きもちい…♡さんごちゃんの…可愛  
いお口…嬉しい…お願い…ッ♡おくちのなか…舐めたい♡…清人お兄ちゃんに…珊瑚ちゃんのお口…舐め舐めさせてほしい…♡」

くちゅ♡…くちゅくちゅ♡……ぢゅうう♡ぷちゅ♡…くちゅ♡ぴちゅ♡

「んッ♡にいにい…♡」

「さんごちゃん…おくち…あーんして？」

「うあ♡」

ちゅうちゅう♡とお互いの唇を重ね合わせる子供のようなキスだけで、二人は顔を真っ赤にし、息を荒げる。

清人は唇を少しだけ離れた後、珊瑚のまんこから指を引き抜く。そして両手で珊瑚の腰に手を回して引き寄せ、ショーツ越しに自分の勃起ちんぽをカクカク♡と押し付け始めた。

「さんごちゃん♡にいとやらしいキスしてイクイク♡ってして？にいがいっぱい腰振ってあげるから♡お願い♡さんごちゃん♡」

「う~~~~~~~~♡♡♡」

耳元で囁かれる大人な声と子供のような言葉のギャップに、珊瑚は思考がぐちゃぐちゃにかき乱される。羞恥と快感と背徳感のせいで、ボロボロと

溢れ出る涙を清人が少しも逃すまいとでも言うように唇で吸い取っていく。  
「さんごちゃん：今はきもちいいことだけ考えて。にいにとぎゅう♡つてしながら気持ちよくなるだけだから」

「にいに♡にいに♡」

「いい子♡いい子だよ、さんごちゃん♡んっ♡ぐッ♡」

清人がグッ♡とお互いの腰を密着させるとぐりぐり♡と腰を押し付ける。  
珊瑚の愛液と清人の先走りでドロドロになった下着はもはや付ける意味を  
なしていない。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「さんごちゃん♡さんごちゃん♡キス♡キスさせて？清人お兄ちゃんが  
っぱいお口も気持ちよくしてあげるから♡」

「ふうう♡っおねがい：にいにい：ッ♡」

ぎゅうっと目をつぶって珊瑚が口を開けると、間髪入れずに清人が舌を  
ねじ込んでくる。

「んううう♡」

「ぢゅう♡…ちゆるる♡…くちゅ♡ん♡…くちゅ♡…珊瑚♡珊瑚♡」

（清人の舌…ぬるぬるして…おつきくて…お口…いっぱいになる♡…ぢゅ  
うぢゅ♡♡って吸われて…体、ビクビクってしちゃう♡）

「ん♡♡♡ふぁ♡…えう…♡ん♡うう♡♡♡♡」

逃げようとする珊瑚の舌に清人のそれが絡みつき、ぢゅう♡と吸い付い  
て外に引っ張り出す。そんな自分の間拔けな顔を、心底愛おしいものである  
かのように見つめる清人の蕩けた瞳に魅了され、珊瑚はきゅうう♡と胸が高  
鳴ってしまふのを感じた。

（食べられる…♡♡清人に…食べられちゃう♡♡）

清人の大きな体が押し付けられ、素股のように清人のちんぽがまん筋を刺激する。

「っ　う　う　　　♡　や　だ　あ　♡　♡　ん　う　♡　く　る　く　る　♡　す　ご　い　の　き　ち　や　う　♡　き　よ　と　お　♡」

「ん　　　？　　っ　く　♡　は　あ　♡　ど　う　し　た　の　お　？」

「い　っ　ち　や　う　う　♡　も　う　い　っ　ち　や　う　の　お　♡　怖　い　ッ　♡　ぎ　ゅ　っ　て　し　て　て　よ　お　♡」

「っ　う　♡　分　か　っ　た　♡　に　い　に　が　ぎ　ゅ　う　♡　っ　て　し　て　あ　げ　る　か　ら、　い　っ　ぱ　い　や　らしい　声　出　し　て　イ　ク　イ　ク　♡　っ　て　言　っ　て　♡　ほ　ら、　お　ち　ん　ち　ん　こ　ち　ゅ　こ　ち　ゅ　っ　し　て　あ　げ　る　か　ら　♡　イ　ケ　♡　珊　瑚　♡　イ　ケ　イ　ケ　イ　ケ　イ　ケ　イ　ケ　イ　ケ　イ　ケ　イ　ケ　♡」

「ん　き　ゅ　う　う　　　　　♡　い　っ　ぎ　ゅ　う　う　　　　♡　♡」

びくびくびく♡と激しく痙攣する珊瑚の体を宣言通りに強く抱きしめた清人は、「ひぐ　う　♡」と自分に強く抱きしめられながら絶頂する珊瑚の頭

に何度も何度もキスを落とす。

「やっと…やっと会えたんだ。もう…いいよなあ？」

初めての快感に意識を飛ばした珊瑚を、清人はいつまでも抱きしめていた。